



見えているのに見えない

常務取締役 堀 田 俊 彦

人の知覚器官に外界から情報が投入されるとき、その投入量が同じでも、いざこれを認識する段階になると、その広さ、深さは、一人一人の知識・経験に左右される。知覚する器官のもっぱら生理的な個人差はここでは問わない。絵画や音楽を鑑賞する時を考えてみればよい。「見る目」があるなしで、大きな違いが生まれる。それに加えて、人間は、情報を生のままではなく、選別しながら取り込む。例えば、舞台上で黒子が動き回るのは、はじめのうち気になっても、やがて意識から消えてゆく。これをまとめて、人の知覚器官には、フィルターがかかっている、しかもそのフィルターは、誕生以来人それぞれに手を加えてきた層と、随時形成する層との二層からなっているといつてよいだろう。

実験から得られたデータ全体がどう処理されるか考えてみる。その結果が、全て想定された枠内であれば、めでたく完了といつてよいだろう。問題としたいのは、予測しなかったデータ、いわば異常値が現れた場合の取り扱いである。前提となる理論にそぐわないとか、思いもつかない結果が混じってきた際、実験者は、どう対応するだろうか。異常値と目される部分が、実験プロセスの誤り、異常な外的要因の影響などの理由で明らかに否定できれば、一件落着で済む。リスクがあるのは、否定できないデータがあるのに、これが置き去りにされることだ。意外にも、それが貴重な情報源であるかも知れない。「見えても目をつぶる」のは論外として、当事者の眼にかかったフィルターが邪魔する結果、思わぬ結果が出て、その目には見えないということが起こる。本人の期待・知見に沿わないデータは、見たくもないし、そもそもあり得ない筈のものだから「見えてこない」ことになる。

当初の実験目的を離れた異常な事象に着目して、そこから大発見が生まれることがある。化学史には、いわゆるセレンディピティーの例が少なくない。そこまでいかなくても、一般に受け入れられた理論の修正に至る位の例はもっと多いのではないか。これを見逃さない眼を持つには、それなりの学習・訓練の蓄積が必要だろう。「やわらかい頭」であった方がよさそうだし、また、運に恵まれることが必要かも知れない。大科学者といえども、その眼に何らかのフィルターがかかっているのは、並みの研究者と変わりはない。肝心なのは、「見えているのに見えない」というリスクを少しでも減らすということだろう。